地震予知の理論とメカニズム

- 誰にも判らなかった！(学界全体)
- 世界初で、地震予知の「理論とメカニズム」が、判りました。
- 地震計とは違う電磁気観測で解明し、本年9/18日日本地震学会(京都大学)で発表しました。（学界注目）
- この観測網を作れば、直下型は１週間前(5千人)、トラフは２週間前の警報で32万人が助かります。

◎警報確率は、天気予報を大きく越える７５％以上となります。（観測網メッシュ≒１０Km以内）

救世主求む！　JYAN研究会　主宰　國 廣 秀 光

○地震の大疑問？が、解けました。

地震の理論やメカニズムは、未だ、正しい観測方法や予知技術が、発表されていません。（地震学界全体で、解明できず地震予知が困難な状態です。）

◎<当予知理論>は電磁観測データで構築しました！

①地下で、縒や歪みや、軋轢等の圧力が集中すると圧力や応力波が発生し、周囲へと伝播します。

②この時点で、殆どの軋轢や応力波は、深層の周囲地圧に圧倒され、地震動は起きていません。

③しかし、地表層まで伝播すると、周囲の地圧が殆ど無くなる為、圧・応力波は膨張拡大し、周囲を破壊し、地震動を起こしています。(観測Data有り)

地震の「振原」は地下深くでは無く、実際の破壊や断層等は表層付近で起きています。この地震の新理論とメカニズムは、地震前兆の電磁波の観測データと、実際の地中観測データから、根本的な裏付けがあります。現在の震源推定は、振動の発生状況に無理があります。

災害予防に地象観測が最高！
地殻観測は電磁気と地震計で完

- **地象観測の目的と概要**

地象観測は、地下全体の動きを把握し、地震の警報や、噴火等の危険予防に活躍できる観測です。

- **現地震計の観測も活用**

現在、気象庁や各機構と市町村等で約４千機が稼働中で、地下深部や海洋の観測網も拡大中です。

- **電磁気（波）の観測が必要**

電磁気（波）観測は、地震等の約１週間前に異常の前兆が掴めることから、最も注目されています。

- **地象観測の観測網構築**

１　電磁気観測で、約１週間前に危険度や切迫度が判るメカニズムが解明できた事から、ようやく地象観測が脚光を浴びています。今後急速に地象観測の研究や開発が進むことになります。

２　地震の原因は、プレート移動だけでは無く、多くの起因がありますので、地象全体の観測技術や研究が発展するので、天気予報並みの地象観測情報と危険警報等が可能になります。

３　地震の地象観測は、地球規模でマグマや地殻の動き等を観測する必要があります。今後は、世界規模で観測ネットワークを構築することになるでしょう。

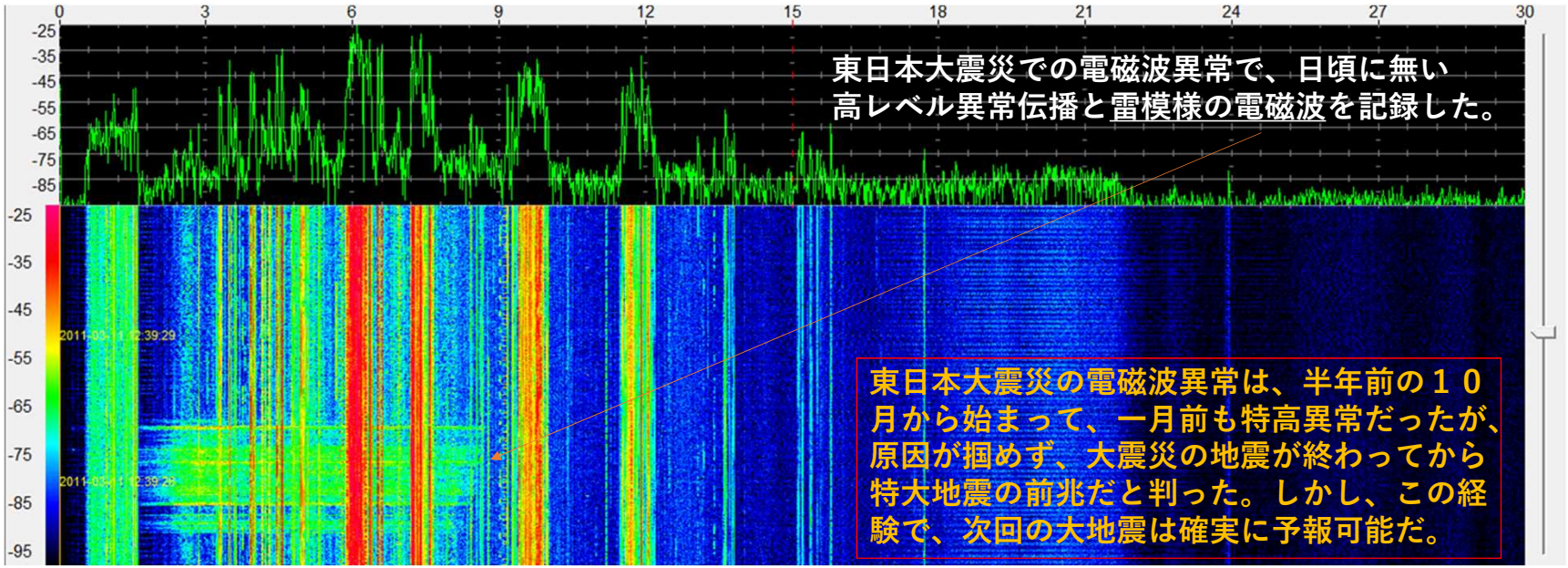
地殻変化で現れる電磁波（気）現象！

◎電磁パルス（ノイズやパルスを観測）
大地の軋轢状況把握(アースノイズやパルス)

◎地電磁界（低周波放送以下のアース領域）
直下型地震等の把握（大地からの電磁界を観測）

◎短波帯（BC放送帯からHF帯ノイズ迄）
広域型探索（AM放送や電離層反射波を観測）

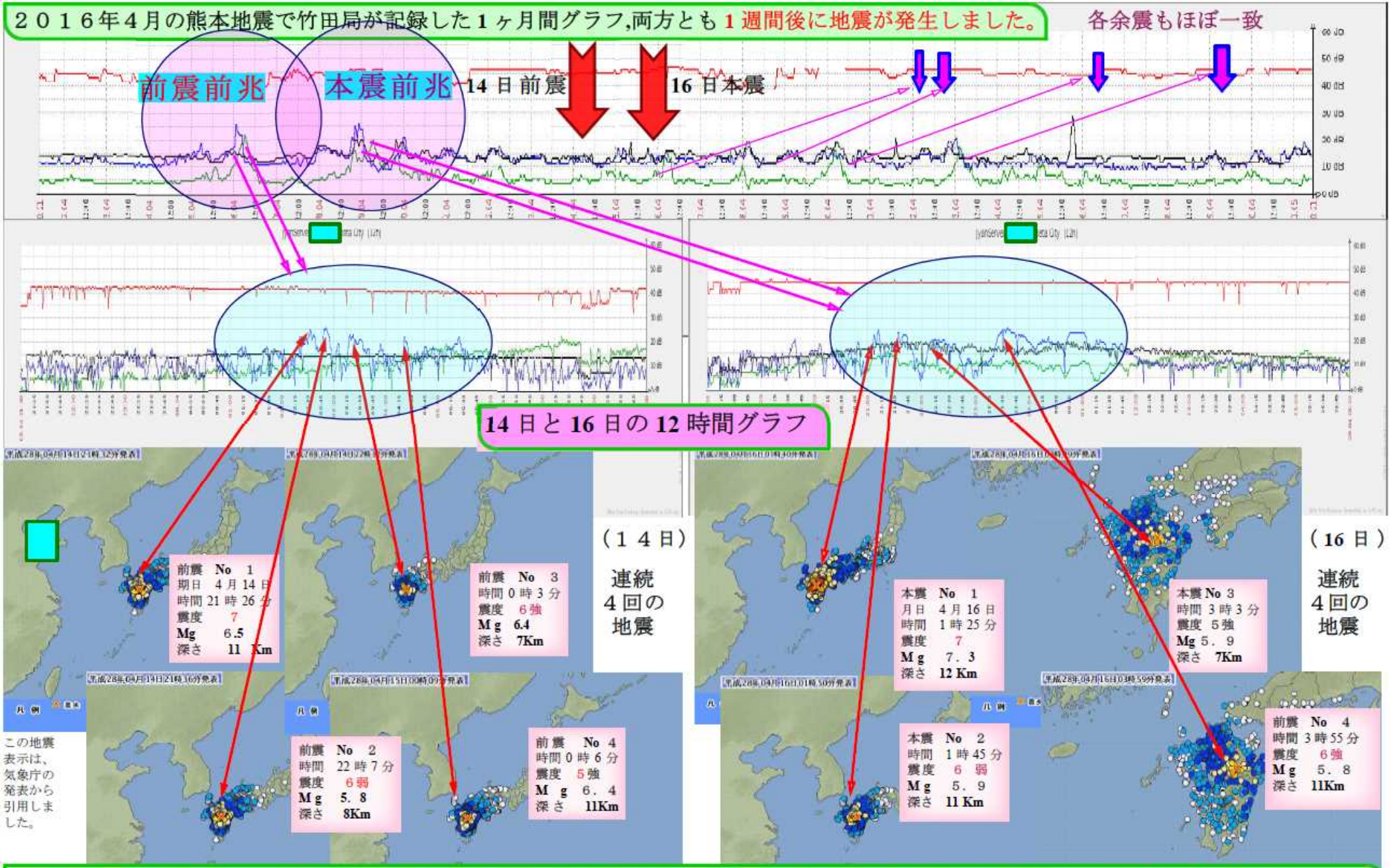
◎FM波（FM放送波等を全国網で観測）
観測網（FM放送波の常時観測から各解析に利用）



３種観測
３原則と切迫度を最高度に発信可能

２０１６年４月の熊本地震で竹田局が記録した１ヶ月間グラフ,両方とも１週間後に地震が発生しました。

各余震もほぼ一致



グラフ上は、竹田局の１ヶ月間グラフです。４月６日と９日に異常なピークがあり、４月１４日と１６日に大きな地震がありました。
グラフ中段は、左半分が１４日の 12 時間グラフ、右が１６日の１２時間グラフです。青色が熊本の電波で、上下が電界強度、横軸は時間

２回の異常と前震、本震　＆　両方とも≒４回の異常ピークと実際の地震がほぼ一致しています。

電磁波観測と地震の確率(１週間前に予知３原則を超越)
最高の例(熊本地震) 前震９５％＆本震９０％(回数＆時間)

グラフの解説

右グラフは熊本地震の前震と本震の電波観測と、実際に起きた地震の記録を３原則や時系列で照合した６時間の観測グラフ

青の下向き矢印は電波観測から地震の予想（異常ピーク）です。

赤の上向き矢印は実際に地震が起きた時間と分を示しています。

◎前震、本震とも異常回数と地震発生回数や時間と大きさが≒同じです。

◎電波観測の異常ピークの間隔時分と、実際の地震が起きた経過時間も≒同じになっています。

結果

○１週間前に、異常を観測した通り、地震が起きた事(証明)となります。

○電磁波異常と実地震が、同じ原因なので、同じ現象となる観測データです。

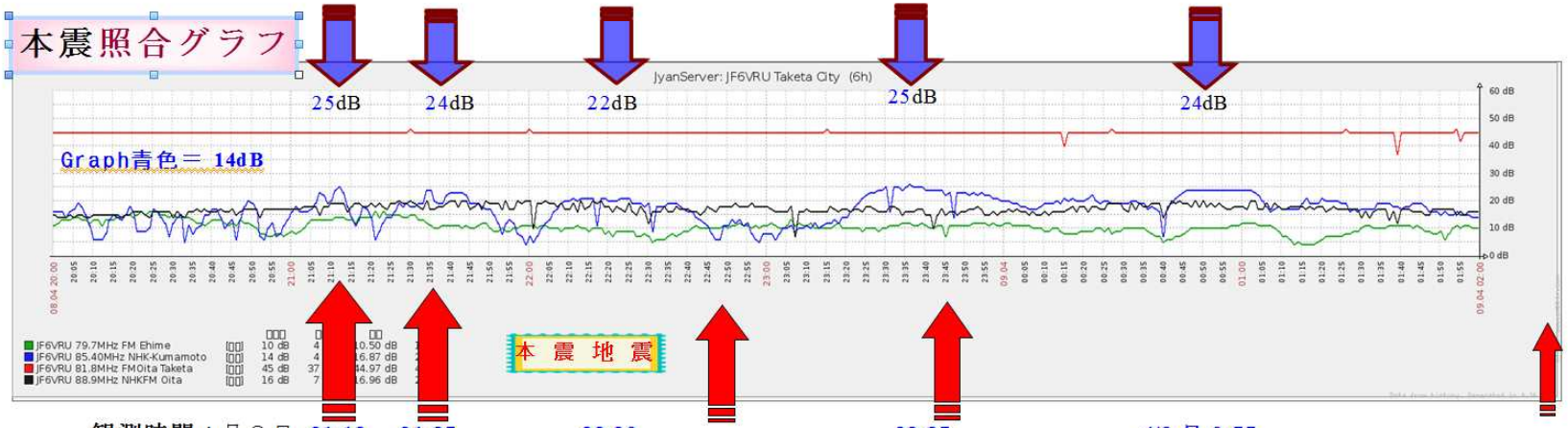
青の下向き矢印は、グラフの電波観測（青ライン）での異常ピーク時です。

前兆と地震回数が一致！

（前兆間隔）

時間や間隔も概ね一致

観測時間４月６日	2;33	2;52	3;23	4;22	5;25
	(19 分)	(31 分)	(59 分)	(63 分)	
地震間隔	(41 分)	(31 分)	(65 分)	(20 分)	
発震時間４月１４日	21;26	22;07	22;38	23;43	0;03&06



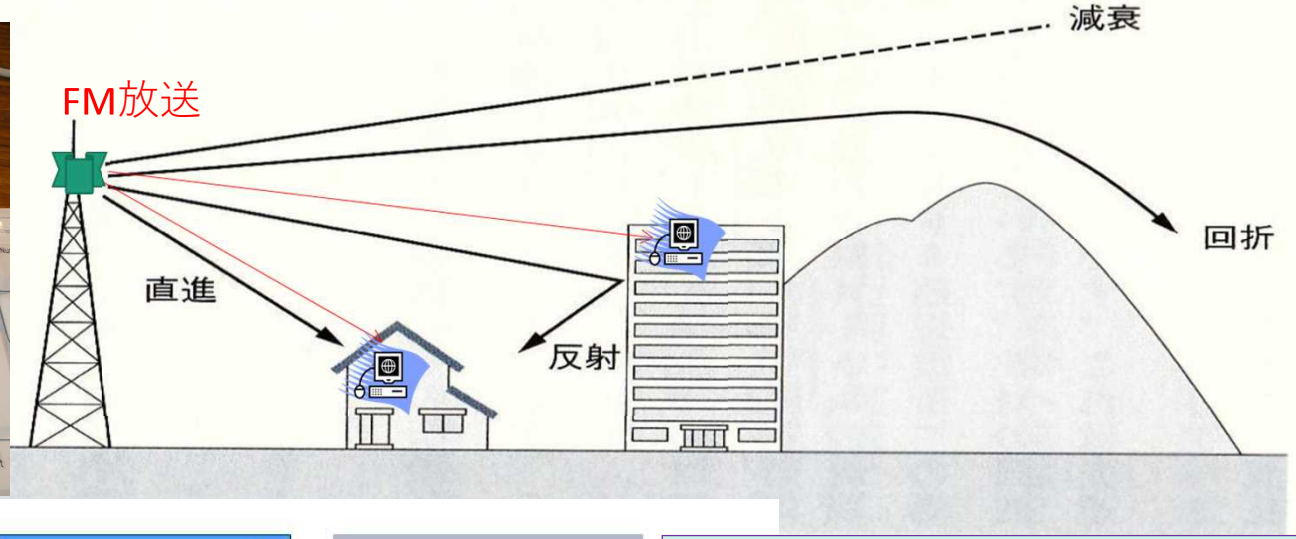
観測時間４月８日	21;13	21;35	22;20	23;35	4/9 日 0;55
(前兆間隔)	(22m)	(45m)	(75m)	(80m)	
地震間隔	(19m)	(77m)	(52m)	(196m)	
発震時間４月１６日	1;25	1;44	03;03	03;55	07;11

本震も回数が一致！

時間も、概ね一致！

これが一週間前に判るとは！！！

地象観測の電磁波受信と観測等の要領



上空と地表と地下から

上 中 下 観測

3 電離層は
上空≒２００km
D E F F2 層

1 空気接地層

1.5 電磁界 層
- 地上高数ﾒｰﾄﾙ～
- 遠地は数百ﾒｰﾄﾙ

2 大地アース
- 震源の深さ数～数十kmで軋轢臨界発生

FM電波の受信観測網は
４～８CHを常時観測しています。
東西南北等で方向探査に利用できます。
FM電波は、常に電力が一定なので、放送波の伝搬ルートに変化があれば、電界強度が直ちに変化するため、観測に適当です。

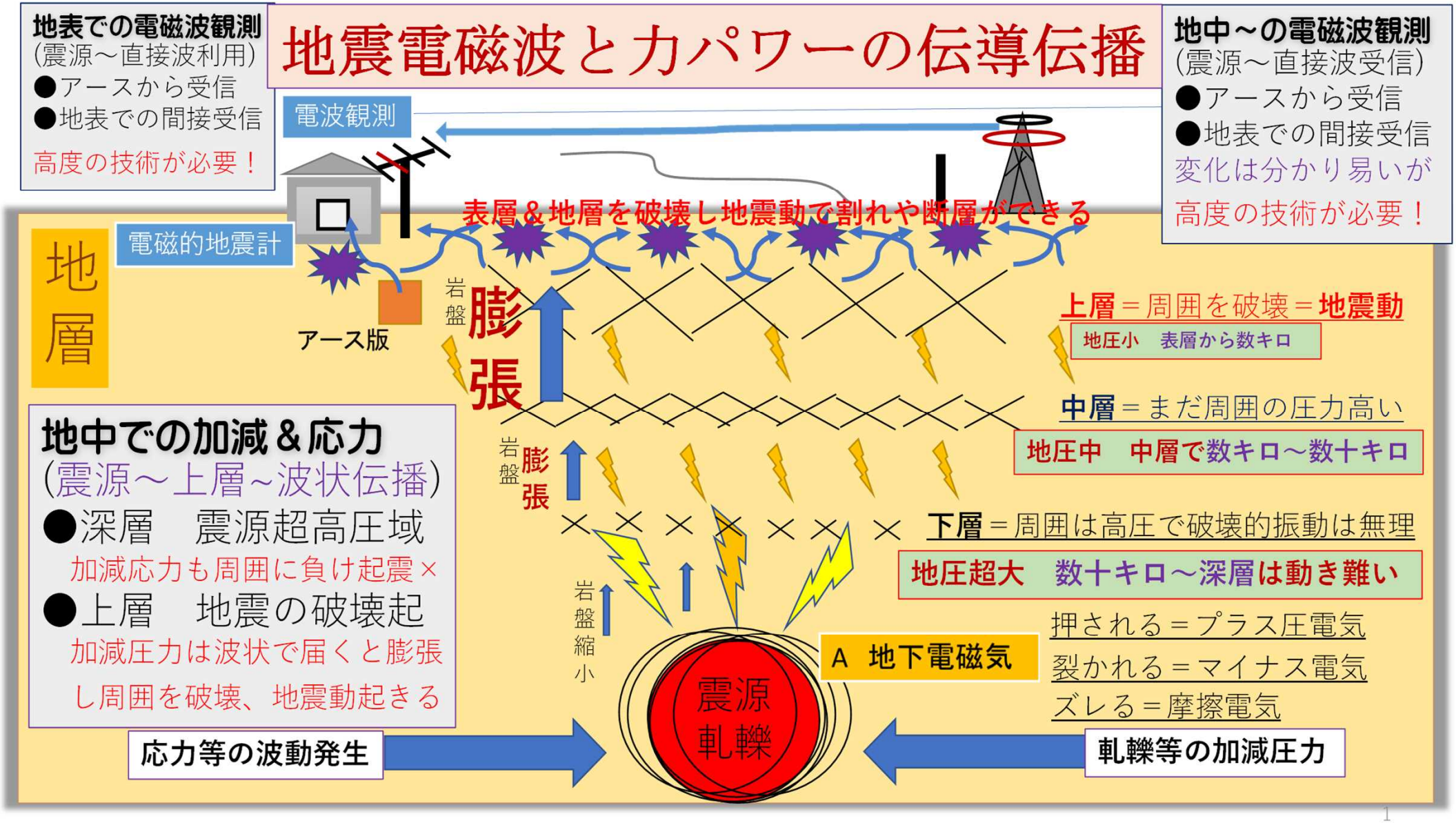
なぜ、地震予知ができるのか？
メカニズム と 理論的 解説
電磁波観測と地中観測Dataから説明可能！

①　地震の原因は多種多様だが、主な原因として、地殻を変動する歪や縒等の軋轢に、各種加減圧が加わって、地震の元となるエネルギーと、反発的応力や、電磁気までが発生しています。

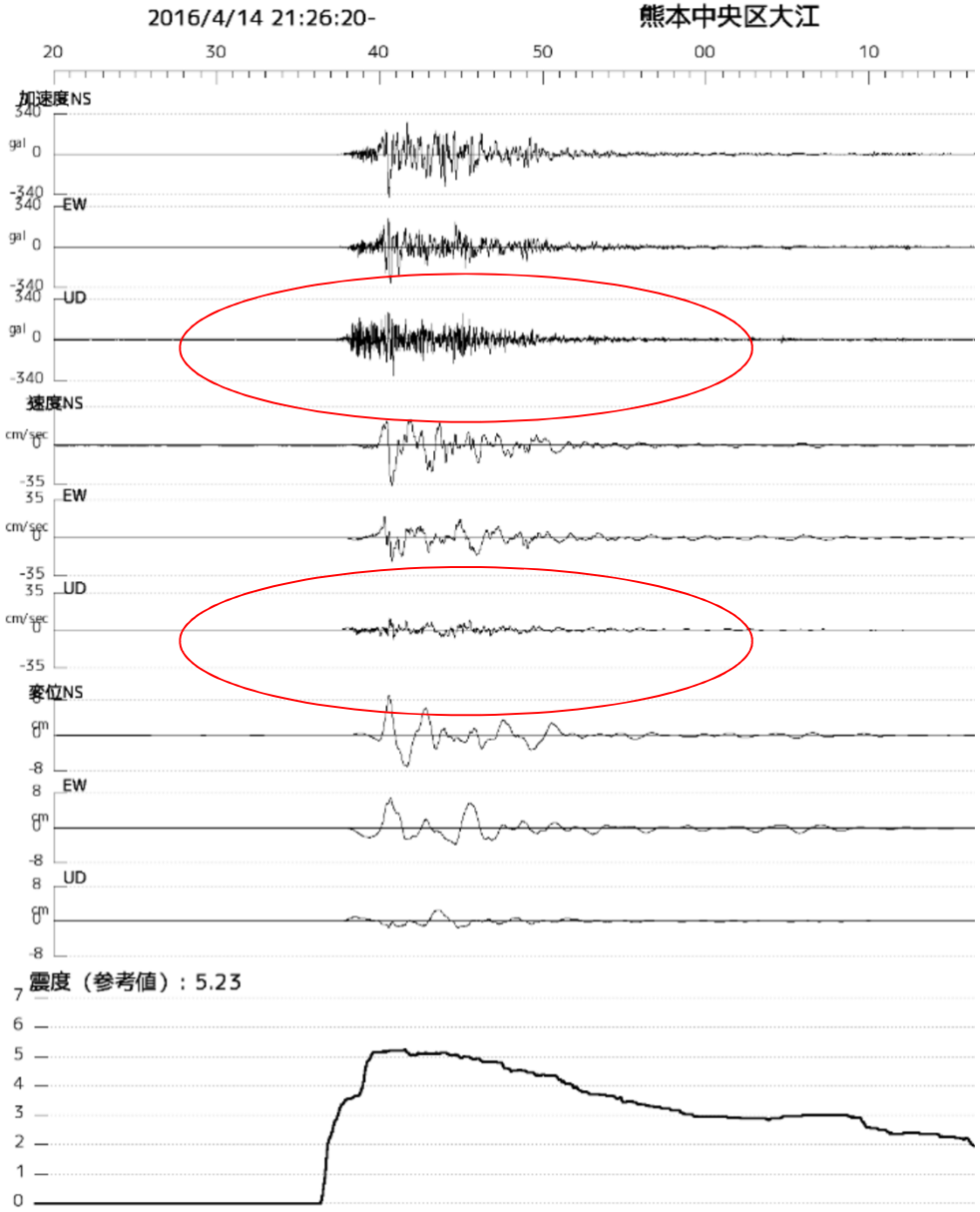
②　この電磁気は周囲へ伝わり、地上でも直ちに観測できるが、地震を起こすパワーやエネルギー（以後「PE」と言う）は、地下深層の場合、周囲の高い圧力に阻まれ、破壊的な地震動にまで、発展できず、PE波として周囲へ波状で伝播しながら拡散します。

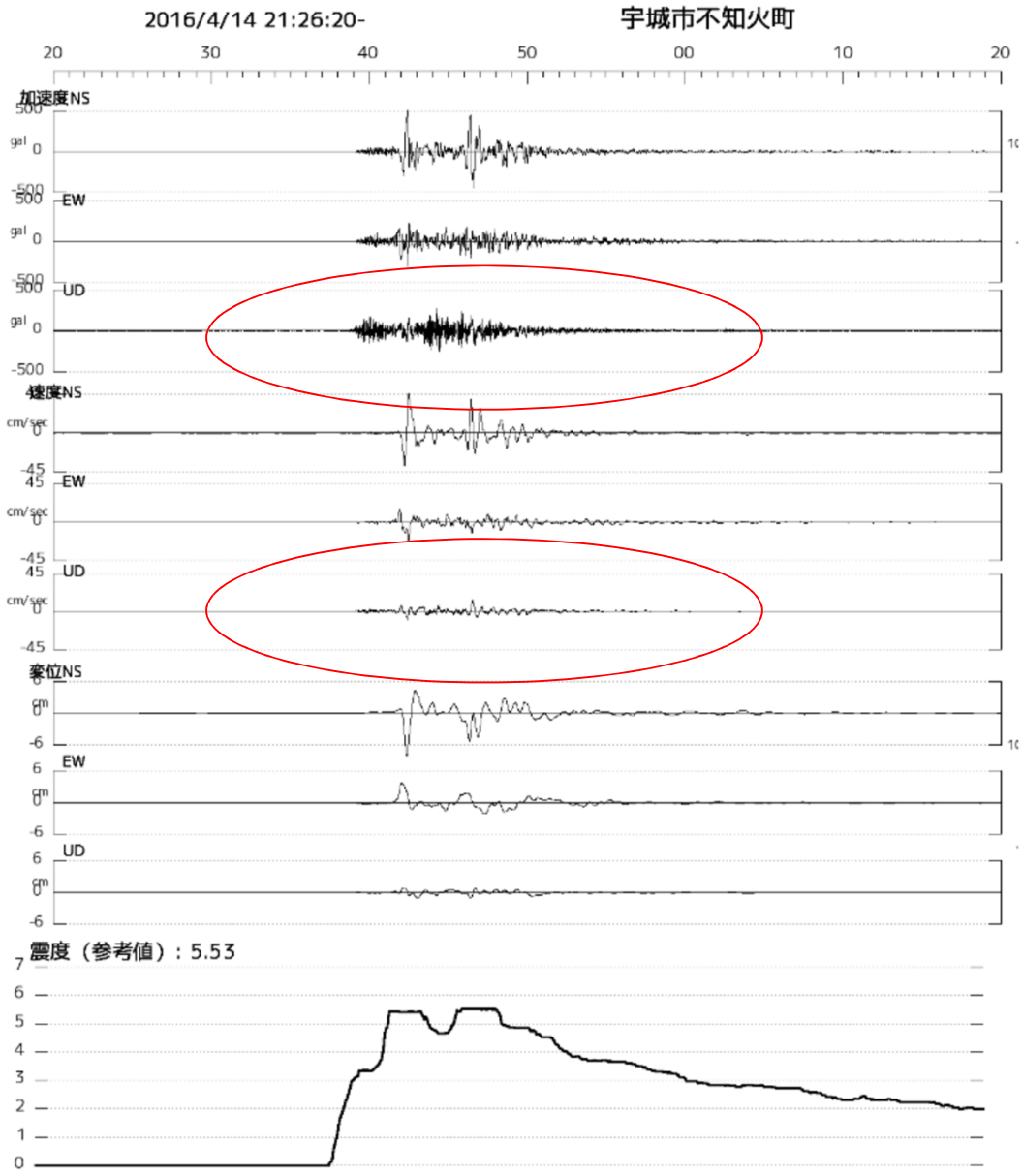
③　PE波が表層の低圧域まで伝播すると、PE塊は、周囲の圧縮力低減で膨張を始め、周囲を破壊し亀裂や破断等の、地震動を起こします。PE塊が大きい場合は、振原域も広くなり、断層が大きく、連続的な地震をも誘発する事が多くなっています。

地震電磁気(電波)と　軋轢パワー(力波)
電波(即)と軋轢波(数km/日)　［伝播解説図］



熊本中央と宇城市の観測で、一番上が地表の観測、上から三番目が地下≒２５０ｍでの観測です。地下の上下動幅に対して、地表での揺幅は数倍の大きさが観測されています。これが、膨張の根拠となり地表付近での爆震根拠です。



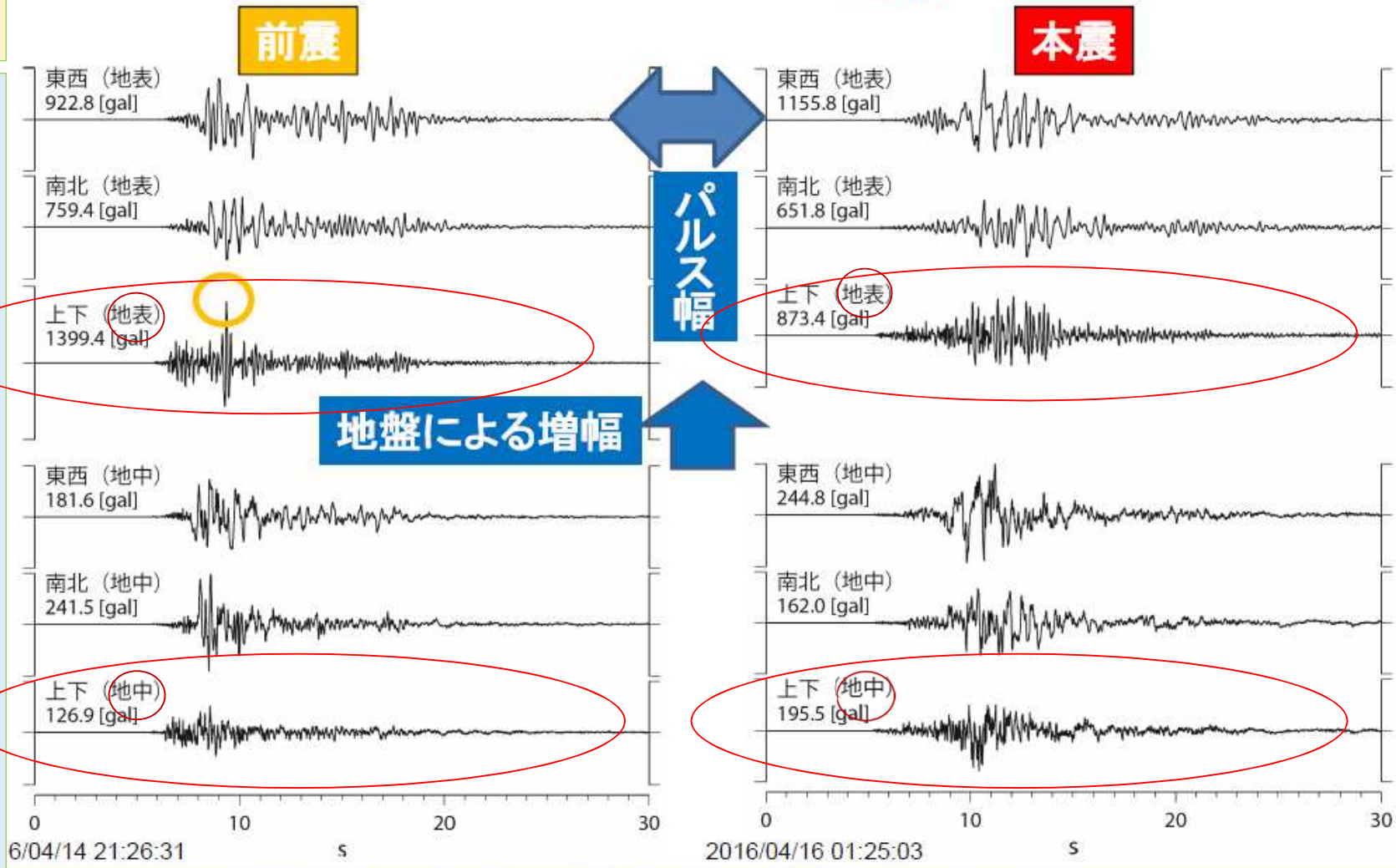


決定的なData

これが決定的な証拠で、
地表と地下250mの上下動差です。
地下数km以深では周囲圧力が強く破壊動が困難になるため、
地震にまで発展できないのです。

KiK-net益城で観測された強震動（前震・本震）

大前震及び本震においてK-NET・KiK-net観測点の中で最大の加速度（1,580 gal
び 1,362 gal：三成分合成値）を記録したKiK-net益城（KMMH16, 熊本県益城町）



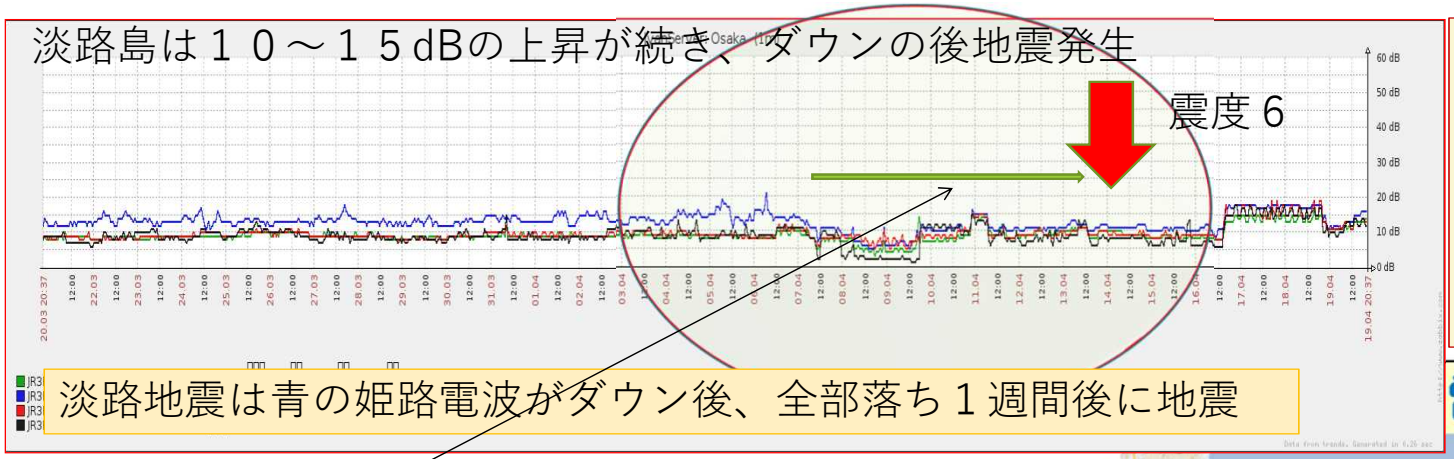
≒１週間前に予知可能な根拠　と
電磁波伝搬と力波伝播速度の解説

- 地震の元となる**軋轢**が起きたときに、**電磁波と力波**（軋轢や応力波等）が起きている。
- 電磁波は直ちに地表の観測網に捕捉され異常が察知できます。
- **力波**(パワーウエーブ)は、波状伝播の性質があり早く伝われません。
  岩地質にもよるが、**一日に数キロ程度**しか伝わらない。(経験則有)
- 従って、電磁波と力波の伝搬速度「差」だけ、早く予知できる。
- **根拠データ**（前ページや下記ページ参照、ノイズやパルスも同じ）

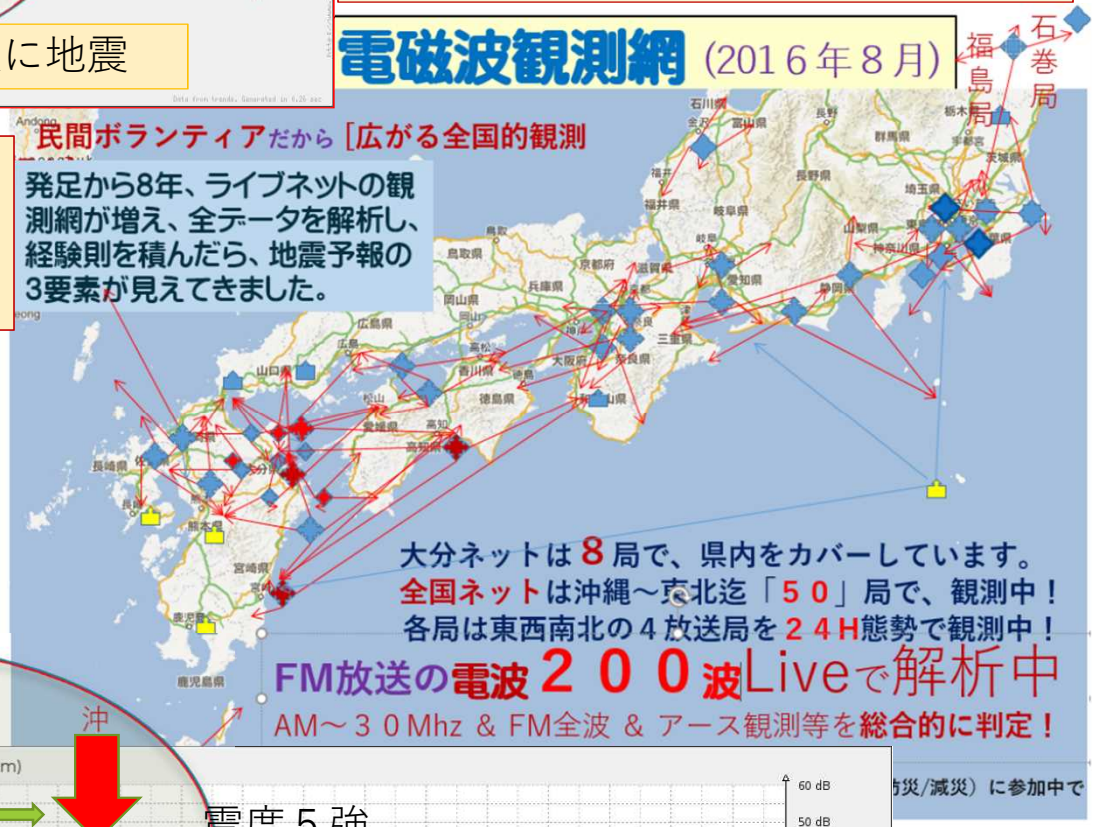
特１　観測網でのDataから{いつ, どこ, 大きさ}が計算可能です。

特２　電磁の３種観測網で、約１週間ほど前に予測発表が可能。

結論「地象観測は、電磁計と地震計で地殻変動をPerfectに把握」



下図は、当研究会の観測網図です。
この他に
短波帯観測網とアース観測網があります。
ＦＭ観測網はクロスチェックや計算式で総合的に３原則を割り出せます。



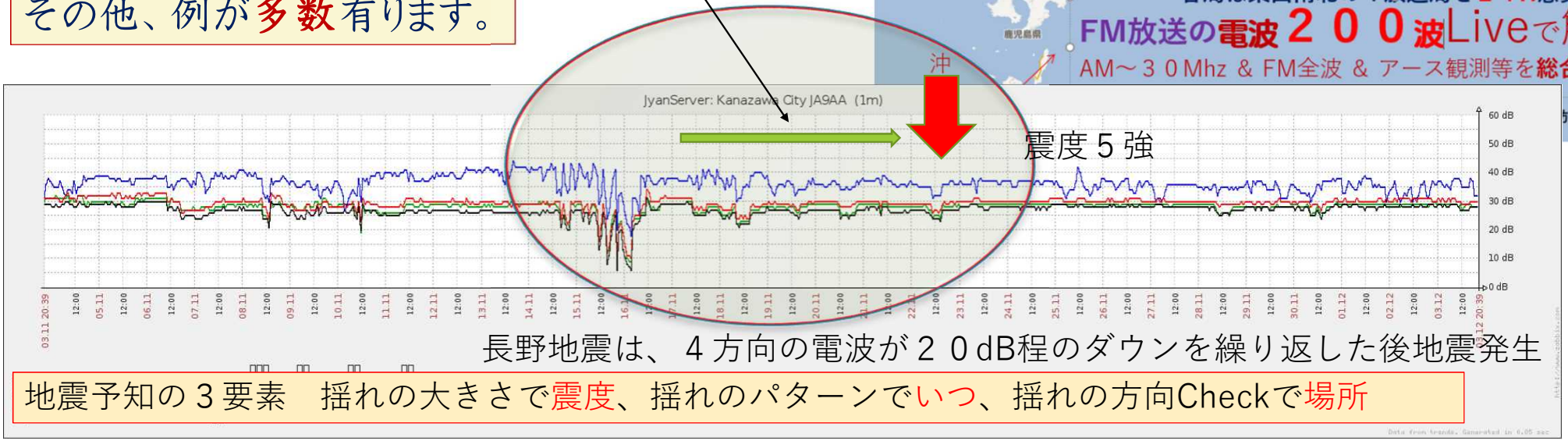
地震の観測例（両方とも１週間後に地震発生）

淡路島地震と長野地震は100%

淡路島はレベルアップ
（2013年4月）

長野地震はレベルダウン
（2014年11月）
その他、例が多数有ります。

観測例



地震予知の３要素　揺れの大きさで震度、揺れのパターンでいつ、揺れの方向Checkで場所

地震のメカニズムや根拠の解説２です。地震は表層破壊と言う根拠データです。

- 地下（地殻の中深層）で、起きた軋轢や応力等のパワーエネルギー（以下PEと言う）は、電磁気や力の波として周囲へ伝播しています。
- この「PE」は、圧力の波として一日に数キロの速さで波状に伝播するが、表層に近付くと周囲の抑圧が減って急に開放される。この時「PE」は周囲の減圧に、逆比例してPE塊全体が膨張します。この膨張が数メートルになれば破壊的振動となり、数ｍの断層を作ってエネルギーを発散している。

根拠の詳細解説

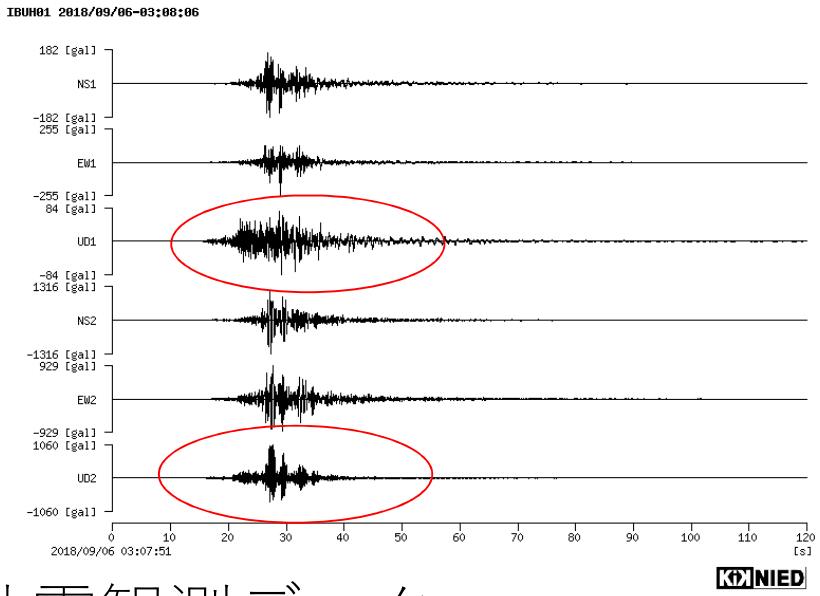
１　直下型地震やトラフ地震等の軋轢は、月や地球の自公転、プレート移動、海流、気象や、マグマ流、地殻移動(上下動含)等々によって生じている。

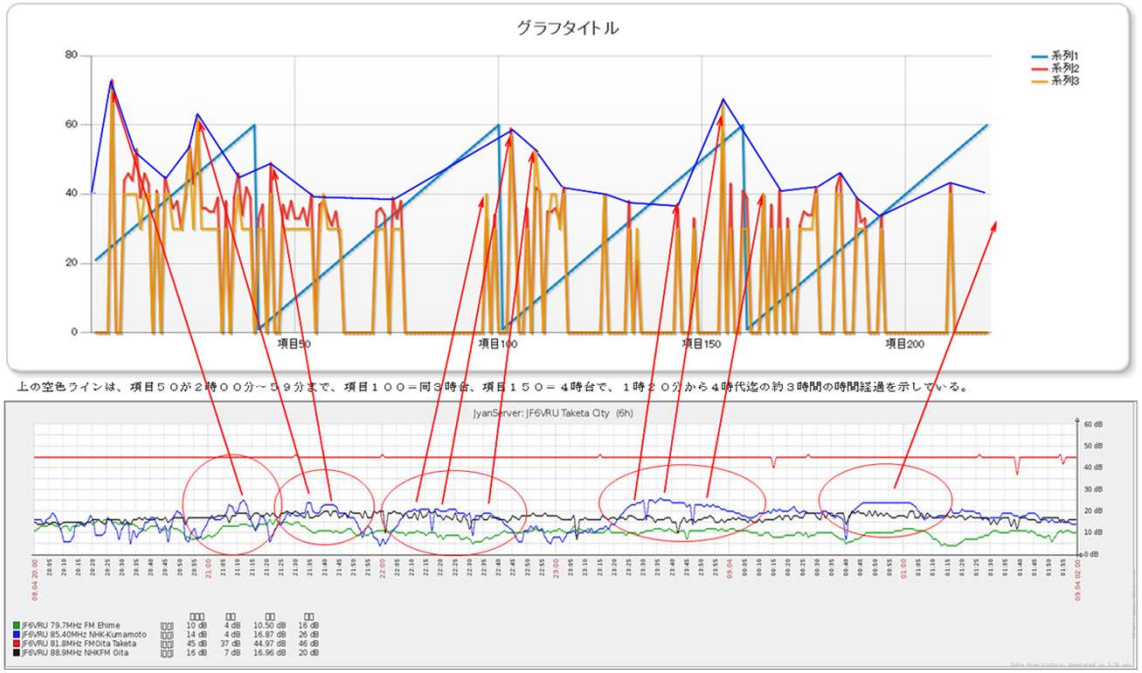
２　軋轢＝震源が、深層の場合は周囲の超高圧に押され破壊や地震動は殆ど起きません。また、超深層になれば極高圧と高熱で熔岩状となり、PE伝播も数十から数百kmもあれば伝播減衰が大きく地震動も小さくなります。

- 根拠データ

１　全図にある熊本地震や他の地震電磁観測データを参照してください。

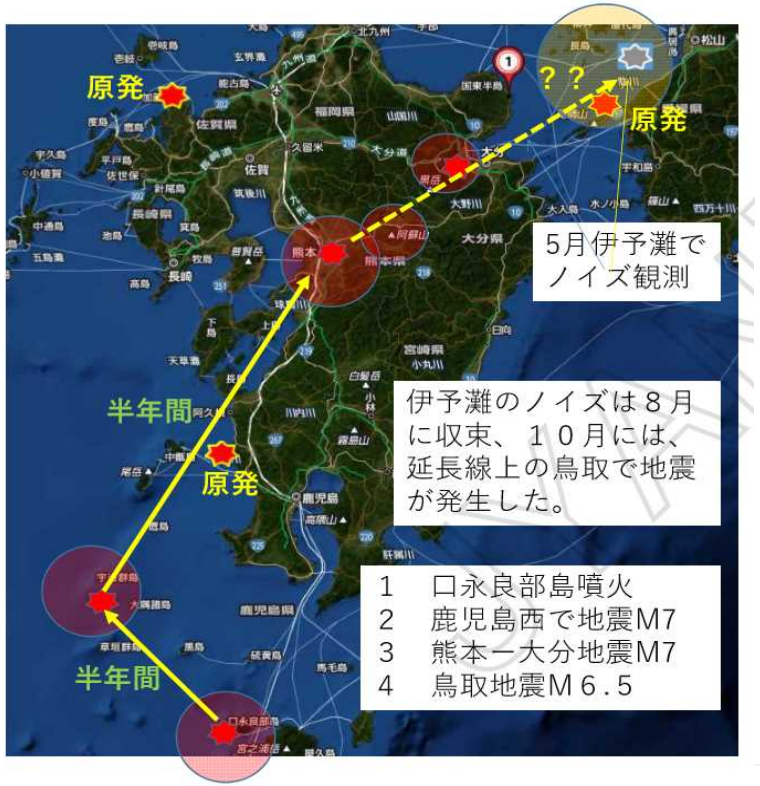
２　地下２５０ｍ付近と表層の振動データを比較すれば、膨張が明快です。



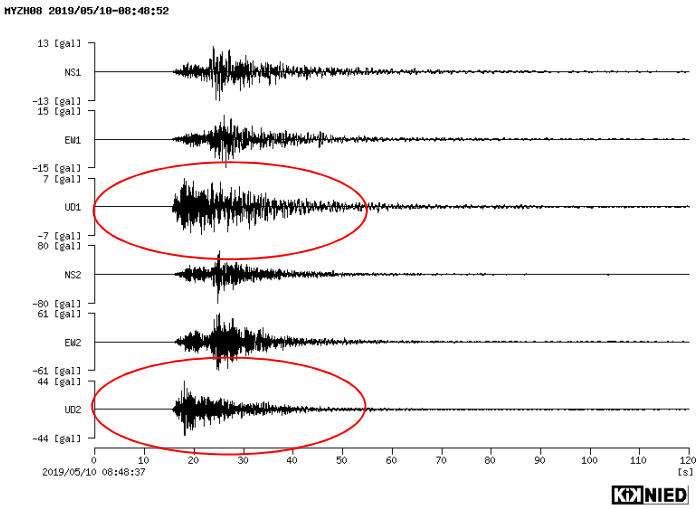


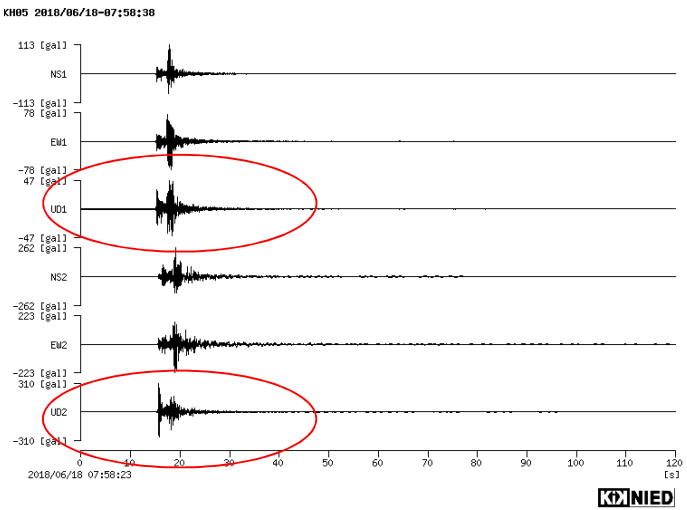
青色注目　４月８日に観測したグラフです。１６日に起きた本震も、相似形となっており、１週間前に観測したデータが正しい根拠となった。
上図の地震と下図のグラフが同じなのは、発生原因が同じな為で、電磁波と力波の伝導速度の違いが早期予知の根拠となっている。

地震観測データ
上は胆振・下は宮崎・大阪



- 電磁波観測から地震発生までの様子
- 地下深層等の圧力状況
- 噴火とEPの伝播状況





地震予知の「理論とメカニズム」＆地表付近で爆発的な地震動が起きる根拠データ発表　(JH6ARA)國廣秀光

- 熊本地震等の重要地震波形データ２種と観測データ各種
- 気象庁が発表する震源について（当理論と比較した結果）

１　気象庁の震源深度は、軋轢が起きた場所と考えられる。
２　上記１であれば、電磁気的な計算式と符合できる。
３　震源とすれば、地震動の伝達が無く、時間もくい違う。
４　地下数百(500)Km以上の超深層では、地殻自体が高温で、溶融状態になっており、地震動は殆ど起こり得ない。
５　また、地下深部は、実際に確認する事が困難なので、推測での発表となります。

・以上から当発表が観測データに合致し、理論的に正しい。